



美術史家、東京大学名誉教授
高階秀爾
Shuji Takashina

「人文知とは何か」

う。

「アルス・ロンガ、ヴィータ・ブレイビス」(ars longa, vita brevis)というラテン語名句がある。直訳すれば、「技術は長く、人生は短い」となるだろう。この場合「アルス」は本来の「技術」の意味である。ところが、「アルス」には「芸術」という語義もある。英語の「アート」はそれに由来する。この語義に従うなら、あのラテン語名句は「芸術は長く、…」ということになる。そこから、「芸術達成の道は長く、人生は短い」という解釈が生まれて来る。

しかしその解釈は、「人生」に着目することでまた新しい、別の解釈を生み出す。人生は短い芸術は永く生き続ける。ラファエロは三十七歳で亡くなったが、その作品は四百年にわたって絵画の Handbook とされて来た。紫式部が何歳で世を去ったか誰も知らないが『源氏物語』は千年以上も長く読みつがれているではないか。つまり作者が居なくなっても作品は残る、いつまでも残る。「芸術は長く、人生は短い」というかの名句は、現在ではもっぱらこのような意味で用いられていると言ってよいであろう。

以上見て来たところから、このラテン語名句にこめられた真のメッセージが、学業修得に志す者への勉

しかしながら、この名句の場合、「アルス」が「芸術」ではなく「技術」だというのは、それが明白な典拠を持つ文章だからである。出典は、古代医学の祖と仰がれたギリシャの医師ヒポクラテスの著作で、そのなかに、「医療技術の習得には長い多年の修業が必要だが、人生は短いから寸暇を惜しんで励まなければならぬ」という医学修業の心得を説いた文章があり、それを典拠としてこのラテン語名句が生まれた。したがってこの場合、「アルス」はどうしても「技術」でなければならぬ。ヒポクラテスの原文ギリシア語が「テクネー」(技術)となっているからである。なお、このギリシア語の「テクネー」が英語の「テクニック」の語源であることは、改めて指摘するまでもない。序で言えば、「ヴィータ」のギリシア語は、「ビオス」(人生、生涯)である。

以上見て来たところから、このラテン語名句にこめられた真のメッセージが、学業修得に志す者への勉

学の指針、ないしは心得にほかならないことは明らかであろう。とすればそれは、中国南宋の学者朱熹の説く、「これまたよく知られた」少年老い易く学成り難し、二寸の光陰軽んずべからず」という詩句の教えと、ほぼ完全に重なり合う。おそらく日本人なら誰しも、中学か高校の段階で、この有名な詩句と出会っているはずである。

それでは、その詩句の説く「学」とは何であろうか。朱熹はその内容を、「格物致知誠意正心修身齐家治国平天下」の八條目にまとめ上げた。世に言う朱子学である。現代の学問体系に対応させるなら、「格物」は「物の理に致る」、「致知」は「知を広く致す」ことで、あわせて今日の物理学、化学などの自然科学に対応する。次の「誠意・正心」は心理、思想、歴史、文学などの人文諸科学、「修身齊家」は道徳、倫理、哲学、そして「治国平天下」は政治、経済、法律などの現代の教育プログラムとはほぼ重なり合うであろう。

江戸時代の日本では、基本的にこの朱子学のプログラムを採用して、優れた学問研究体制を築き上げた。幕藩体制下、諸藩は、秋田(佐竹)の明徳館、水戸(徳川)の弘道館のような藩校を設立し、多くの学者(主として儒学者)を招いて子弟の教育にあたらせた。岡山池田藩などには、藩校のほか一般庶民のために、立派な閑谷学校(現在のその建物は国宝に指定されている)を創設して、身分の違いにこだわらず、誰でも受け入れた。町人や商人たちは、子供をこのような学校や、あるいは寺子屋に通わせて教育に励んだ。

これらの施設での教育は、中国士大夫の教養の基礎である六芸(礼・楽射御書・数)に倣って行われた。「礼」は礼節、作法、「楽」は歌舞音曲、「射」は弓術、「御」は馬術、「書」は文章術、習字、「数」は算術である。授業内容は、いわゆる「四書五経」をテキストとした素読が中心で、例えば教師が「子曰く、朋あり遠方より来たる、また楽しからずや(『論語』)」と唱え、子供たちは大声でその文章を繰り返す。また算術では、算盤を使って、「二二天作の五」などと唱えながら計算法を学ぶ。まさしく、濫漶の唱え、論語と算盤の世界である。これらの教育によつて、明治期以降の近代化の時代に、日本人はただちに西欧諸国の文化技術を受け入れて、急速な近代化を達成することができたのである。

それと同時に、「和魂洋才」と言われたこの時代に、日本人の伝統的な美意識が生み出した豊かな成果が失われることなく生き続けたことも、見逃せない。つい数年前、元号が平成から令和へと変えられた際、新元号「令和」が、千五百年以上も昔の『万葉集』から採られて話題となったことは今も記憶に新しい。そのことは、『万葉集』に残された日本人の言語文化の所産が、今日でもなおその豊かな生命力を保ち続けていることを物語る。実際、日本最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の「仮名序」は、「やまとうたは人の心をたねとしてよろづの言の葉とぞなれりける」と述べて、『万葉集』以来の表現の伝統が「古今」を通じて生き続けていることを確認してい

これと同時、「和魂洋才」と言われたこの時代に、日本人の伝統的な美意識が生み出した豊かな成果が失われることなく生き続けたことも、見逃せない。つい数年前、元号が平成から令和へと変えられた際、新元号「令和」が、千五百年以上も昔の『万葉集』から採られて話題となったことは今も記憶に新しい。そのことは、『万葉集』に残された日本人の言語文化の所産が、今日でもなおその豊かな生命力を保ち続けていることを物語る。実際、日本最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の「仮名序」は、「やまとうたは人の心をたねとしてよろづの言の葉とぞなれりける」と述べて、『万葉集』以来の表現の伝統が「古今」を通じて生き続けていることを確認してい

人文知NOW

和解への道

「壬辰戦争」を終結に導いた論理

二〇一七年の秋、人間文化研究機構の若手海外派遣プログラムの支援を受け、韓国で短期の在外研修を行った。目下のコロナ禍にあつては遠い昔のことのようだが、私の研究にとって大きな糧となったことは間違いない。

私の専門は日本中世史。学生時代から「国境の島」である対馬を軸として、日本と朝鮮との交流史を研究してきたが、なかなか「日本史」の枠組みから抜け出せないでいた。だが、二冊目の単著を刊行したのを区切りとして、逆の視点からも「日朝交流史」を追究したい、つまりは「韓日交流史」を追究したいと考え

朝鮮半島に甚大な爪痕を残した「壬辰戦争」(文禄慶長の役、壬辰・丁酉倭乱)は重いテーマだが、研究の幅を広げるべく取り組

る。「古今和歌集」の成立は九〇五年、すなわち十世紀初頭のことである。英仏、伊、独など西洋の主要国が、それぞれ自国の言語表現によつて国民文学を生み出したのが、せいぜい十四世紀以降であることを思い出し、日本はきわめて長い。それは、「源氏物語」や「枕草子」などの王朝文学、『平家物語』や『太平記』などの戦記物、江戸時代の黄表紙、合本、そしてそれぞれに関連する美術、演劇、舞踊、音曲なども合わせて明治期以降の近代化から現代まで脈々と受けつがれ、建築、デザイン、舞台芸術、映画、マンガ、アニメなどの多彩な世界を生み出し続けている。

ここで改めて「人文知」とは何かと問われれば、これまでに述べてきたことのすべてがその答えとなるが、敢えて要約すれば、日本人の繊細な美意識(和魂)に裏付けられた叡智(知力)の知的活動が生み出したすべての文化所産、それが「人文知」にほかならないのである。

PROFILE

美術史家 東京大学名誉教授 高階秀爾

一九三二年東京生まれ。東京大学大学院在学中、フランス政府招聘給費留学生として渡仏、西洋近代美術史を研究。東京大学教授、国立西洋美術館長を経て、現在、西洋美術振興財団理事長、大原美術館館長。文化勲章受章、日本芸術院院長。人文知応援フォーラム理事。

務だーという理念を主張した。「寛大な心をもち、過去に固執せず、未来を志向すべきだ」とも主張し、日本を「不倶戴天」の敵とみる反対派を抑え込んだのだ。

逆に「夷」の役回りを演じたのが対馬の宗氏だった。むろん徳川幕府に属する大名なのだが、朝鮮に対して「夷」として従属する姿勢を示すことで、「帝王待夷之道」を現実化してみせた。貿易の再開を図る実利重視の動きではあったが、これによつて幕府と朝鮮との衝突は回避され、早期に講和が実現したのだ。

外交交渉において相互に建前や利害を主張しあうのは当然のことだが、相手側の面子を尊重し、衝突を回避するための回路を確保しておくことも肝要だったといえるだろう。

国立歴史民俗博物館准教授 荒木和憲

一九七八(昭和五三)年、福岡県生まれ。著書に『中世対馬宗氏領国と朝鮮』(山川出版社、二〇〇七年)、『対馬宗氏の中世史』(吉川弘文館、二〇一七年)がある。

人文知の本棚



『平家物語大事典』

(大津雄一日下力・佐伯真一・櫻井陽子編 東京書籍・二〇一〇年刊)

歴史小説を書いている私であるが、すべての時代が好き、というわけではない。苦手どころかお手上げなのが「戦国」だ。男性作家と話をするとまったくついていけない。今度の大河の舞台となる鎌倉もあまり興味を持ってない時代だ。

そんな私が、中世を材として「平家物語」を書くことになった。もともとある古典を、小説として再構築する作業は既にやった。七年前に書いた「源氏物語」である。

が、「平家物語」の方がはるかに面白い。それは実際に生きていた人たちの物語だからである

いわば超訳の「平家物語」を書くにあたって、この事典を手に入れた。多くの人が、知的好奇心があるにはあるが、まだ手順がわ

からなかった子ども時代、百科事典をめくるのがむやみに楽しかった。

この事典もそれに似てしまいかもしれない。「ふじわら」の項をずっと読んでいくだけで興味はつきない。

たとえば「藤原成親」を見ていく。彼は「鹿谷の陰謀」に関わったとして、処刑される人物だ。こまでは誰でも知っているだろう。「妹が平重盛の北の方、娘は重盛嫡男平維盛の妻」というのも、歴史に詳しい人ならご存じに違いはない。しかしこの事典のすごいところは、「後白河院の寵愛の背景に、男色関係があつたことを示唆する」と明記してあるところだ。そしてついでに「平維盛の妻」の項を見る。平家物語には、維盛が愛妻との別れの時に、

「誠に人は十三、われは十三より見そめ奉り」とある。花のように美しい少女だったらしい。後白河院からの誘いもあったとあり驚く。後白河院という人は、同性の愛人の娘まで狙っていたということ、これだけで小説家は三十枚の短編を書けるのである。小説家でなくてもめくっているだけで本当に楽しい。甲冑や矢、刀の説明は詳しくカラーとなっている。今まで「ひよどり越え」がピンとこなかったのであるが、サラブレッドを連想していたからだ。日本の原産種の馬の写真をみてすべて納得した。

この事典の欠点といえば、あまりにも厚くて高価なことであるが、何年も楽しめると思えば安いものだと私は思う。

小説家・エッセイスト 林真理子

一九五四年、山梨県生まれ。小説、エッセイ、評伝など著書多数。直木賞、吉川英治文学賞、菊池寛賞などを受賞。直木賞他、数々の文学賞の選考委員を務める。日本文藝家協会理事長。人文知応援フォーラム理事。



国史編纂委員会の資料館